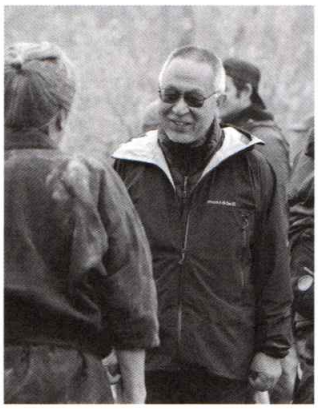
会報 峠 とうげ
河井継之助記念館
友の会会報
第29号
2021.3

〈編集・発行〉
河井継之助記念館
新潟県長岡市長町1丁目甲1675-1
〒940-0053
Tel.0258-30-1525
Fax.0258-30-1526
頒布価：50円（送料別）
〈編集人〉
荒木法子　恩田富太
堀口晴夫　友の会事務局
〈構成・印刷〉
高速印刷株式会社

映画『峠』の完成にあたって

『峠 最後のサムライ』監督・脚本　小泉 堯史



映画『峠 最後のサムライ』の完成後、新たに司馬遼太郎さんの著作を読んでいた折、次の文章に出会いました。友の会の皆さんには既に馴染みの言葉でしょう。

「私が小説を書く人間になってほんとうによかったと思えたのは『国盗り物語』や『竜馬がゆく』『峠』を書いたときです。人間はいつか死にますが、そのときの「遺書」のつもりで書きました。日本人とはいったい何者か、というのが一般的なテーマなんですがね。自分が日本人について考えたことを小説にして残しておきたいというはっきりした意図で書いたのが特に『竜馬がゆく』と『峠』です。」

司馬遼太郎 著
『手掘り日本史』（文春文庫）

「この時代、幕府の親藩、譜代はほとんどが新しい「時勢」に寝返った。この情勢下に河井継之助というような存在がもし出なかったとしたならば、私は日本人というものを信ずべからざる人種であるように思う」

司馬遼太郎 著
『司馬遼太郎が考えたこと3』（新潮文庫）

司馬さんは『峠』に於いて、サムライとして美しく生きた河井継之助に、信じうるに足る日本人を感じとったのでしょう。司馬さんが描き切った継之助の魅力を、映画と云う時間の中で花を咲かせ実らせたいと、スタッフ、キャスト一体となって取り組みました。

役所広司さんをはじめ、素敵なキャストに恵まれ楽しい撮影となりました。別けても時代劇にとって素晴らしいロケ地が新潟県下に在ったことは、俳優さんが演じる上に於いても、撮るスタッフにとっても大きな支えとなりました。

関川村の「渡邉邸」や新潟市の「北方文化博物館」をはじめ、「市島邸（新発田市）」「西脇邸（小千谷市）」「雲洞庵（南魚沼市）」「慈光寺（五泉市）」「長谷川邸（長岡市）」等々。

フィルムコミッション、参加して戴いたボランティアの皆さんのご助力あってこその映画『峠』でした。

福澤諭吉が「痩我慢の説」の中で、古来士風の美といえば三河武士の右に出る者あるべからずと言っていますが、その士風は牧野家、参州牛久保の壁書をして、長岡の地に二百五十年に亘り深く根を下し、万世の要となりました。福澤諭吉は、西軍に敵する勇気もなく、勝敗をも試みず降参したならば、三河武士の精神に背くのみならず、国の根本たる士風を弛めたる罪を遁れることは出来ない。そして、一時の兵禍を免れようとして、万世の士気を傷ってはならない、と誡めています。

司馬さんが継之助に求め得た、日本人としての美しい恒心は、そこに在ると思います。

現在、世界はウイルス禍に巻き込まれています。こんな時こそ映画をとおし、継之助の心を心とし、今を生きる勇気を感じ取って戴けるのではとひそかに願っています。

それにしても映画の上映を待たず、稲川館長の逝かれたことが残念です。稲川さんは先達として立派な著書を残して下さいました。継之助が書き写した吉田松陰の「士規七則」の一つに、完成した徳を得たり才能を育てるには、良き師、良き友との出会いが大切であると説いています。稲川さんの志を受け継ぎ、友の会のおひとりおひとりが良き友を得、継・サの輪が益々大きく広がってゆくことを願っています。

小泉 堯史（こいずみ たかし）

プロフィール

映画『峠 最後のサムライ』監督・脚本
1944年生、茨城県水戸市出身。70年に黒澤明監督に師事し、28年間に渡り助監督を務めた。黒澤監督の遺作脚本『雨あがる』(00)にて監督デビュー。この作品でヴェネツィア国際映画祭の緑の獅子賞、日本アカデミー賞最優秀作品賞をはじめとする8部門で受賞。その後、『阿弥陀堂だより』(02)、『博士の愛した数式』(06)、『明日への遺言』(08)、『蜩ノ記』(14)を監督。それぞれの作品で日本アカデミー賞など数々の賞を受賞している。また18年公開『散り椿』では脚本を務めている。